

大学院派遣研修報告書

所属校	豊島区立千登世橋中学校	氏名	濱 脇 みどり
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	美術教育専攻 美術科教育コース
研究テーマ	中学校美術科におけるゆたかな描画活動に向けての考察 －現代社会を生きる自己への視点を通して－		

I 研究の概要

〈論文要旨〉

中学生にとって、描画活動の意味や役割とは何だろうか。また、豊かな描画活動には何が必要なのだろうか。この問いに答えようとして論文は書きはじめられた。

中学生の描画はほかの領域に比べて精彩を欠いたものになりやすいことは昔から指摘されてきた。それは、授業内で扱われる題材や表現方法が、中学生が生活の中で感じている「リアル」との間に齟齬を来していたり、また自分の技量と表現したいイメージとのギャップが彼らの表現意欲を失わせたりすることが大きいと考えられる。

また、描画活動の教育的な機能を大きくとらえると、「描くこと・見ること」によって自分の内側と外側に広がるものごとを明確にとらえることができること、イメージを豊かに広げる力がつくこと、そして色・かたち・テクスチャーを自由に扱うことで得られる開放感や充足感が心の安定をもたらすこと、などと考えられた。では、現代社会を生きる中学生に対して、このような性質を持つ描画活動が果たすことのできる役割とは、どのようなものになるだろう。またそれは、学校教育の中でどのように位置付けられるだろうか。

このような点について考察を深め、子供たちの人格形成に有効なものとなる豊かな描画活動を提示するために、本論文では、わが国の戦後道徳教育と美術教育の流れを概観することからはじめた。描画活動の土台となる教育の目的、美術教育の目的についておさえておきたかったからである。さらに、副題を「現代社会を生きる自己への視点」とし、現在私たちの生活の中で起きている様々な現象について、主に社会学や心理学などの分野で行われている議論を参考にしながら、深めていくことにした。

本論文はこのような議論の進め方を基に、描画活動の具体的な事例について考察し、中学生にとっての「現代社会を生きるために有効なツール」としての描画活動についての考え方を示そうとしたものである。

〈論文の目次〉

はじめに	1
第1章 教育の目的とは何だろう	
－道徳教育を入り口に、日本の教育について考えてゆく	
1. 道徳教育の歴史を振り返る	7
道徳教育から日本の学校教育が目指す人間像を考える	
「修身」と「教育勅語」 敗戦から「道徳」特設まで	
「生まれたての民主主義」の道徳教育 その後の道徳教育	
「臨教審」以降 「保守的伝統的倫理観」	
2. 日本の教育の特徴とは	18
教育の目的 すでにある社会の枠組みや規範に自らを従わせようとする」こと	
「人間性への深い信頼」と「対話」	
「人間の内面について」考えること	

3. 日本の教育、これからの課題…「自立した市民を育てる」	25
-------------------------------	----

第2章 美術教育とは何だろう

ー社会と自己の在り方との関係で考えるー

はじめに	29
1. 美術教育の流れを概観する	30
現在見えていること 戦後美術教育を振り返る（高度成長まで）	
戦後美術教育（70年代後半以降） 北川民次の言葉から	
2. 美術教育の根幹とは	36
芸術体験としての美術 美術教育をすすめる上で子どもの内面について	
知っておくことの必要性を確認する	

第3章 現代社会と自己の在り方について考える

プロローグ 「自由からの逃走」について考える	42
「自由からの逃走」を読む ドイツにて	
「児童生徒の問題行動対策プログラム」を見る	
この章のはじめに	47
1. 大きな物語の凋落	48
大きな物語の凋落 それぞれの対処の仕方	
好ましくない事態なのか 子どもたちにとって	
2. メディア化	53
マスメディアの影響力とそれへの対応	
コミュニケーション・自己表現の変化	
視覚情報の氾濫と実体験の不足 視覚情報を内面化すること	
現実とは何か バーチャルということ	
3. 資本主義化の徹底	62
「消費者・生産者（労働者）・投資家」として	
教育における効率化 「階層化・格差」の問題 ちがう生き方	
4. 共同体の変容	70
家庭 学校・職場 地域	
新しいつながり 多元化する自己	
この章のまとめ（特に中学生のあり方について）	77

第4章 描画活動について考える

1. この章のはじめに	82
「美術」の中の「絵画」の位置 「描画活動」という言葉について	
「描画活動」の特徴 本章のねらい	
2. 中学生の描画活動を考える際の視点について	89
〈題材：なにを〉〈技法：どのように〉〈支援：教師のかかわり〉	
3. 描画、様々な取り組み	
(1) 「衝撃的美術教育のすすめ」と中堂元文の実践をみる	90
「動機に基づく」とは「子どもの視点・立場に立つ」こと	
タブーへの挑戦 教師のねらい（願い）と子どもの思い	
中堂元文の実践 ○・△・視覚・触覚	
ひずんだ自画像 自己を見つめ、高い価値に気付く	
(2) 酒井式描画指導法について考える	100

	「絵の苦手な子をなくしたい」 「シナリオ」にしたがって 絵を描くということはどういうことか 技術を教えること	
(3)	自実践を振り返る ①「私のお気に入り」 105 題材について 教師側が抱いている「描かせたい絵」 かたちをとること キラキラ感とほわほわ感 課題 「写実」という方法を手に入れることの大切さ	
(4)	自実践を振りかえる ②「モダンテクニックを生かした表現」から 114 技法体験について 見立てとコラージュ ー教師のねらいと子どもの思い ひとつの見立てからイメージを広げていく 描画ツールのひとつとして利用ー手で描く代わりに ひたすらコラージュ、その先に見えてくるもの 女の子タイプ 男の子タイプ 生活に目標をもち快適にしようとする、生活のありのままを 受けとめること 暴力などの表現について 表現活動の意味や価値に気づくこと	
(5)	『“癒し”としての自己表現』について考える 130 見学レポート 『“癒し”としての自己表現』とは？ 「風景画としての自画像、自画像としての風景画」の話 ピーチブラックとアイボリーブラックの違いを伝える 「心の杖として 鏡として」描く、ということ 合評会、そして表現と癒しの場作り 中学生の描画活動に生かすために	
4.	まとめ：中学生の豊かな描画活動のために 141 5つの事例を振り返る 5つの事例から見えてくるもの：ゆたかな描画活動に向けての考え方 ありとあらゆる手段を使って、揺さぶりをかける 「べき」で見ない、とらわれのない心で「ありのまま」を見る 上手くできても、完成度が高くても、豊かとはいえないのでは？ すべての生徒が楽しみと有用感を感じる描画活動を目指して	

むすび

	美術教育の価値を多くの人と分かち合うために 147
--	---------------------------------

〈成果と課題、など〉

描画活動について考える論文であるのに、道德教育について考えることから出発した。それは、教育の目標をどこに置くかについて、考えるためであった。この論文ではその目標を「自立した市民」と捉えた。それは、自分で考え、判断し、行動する。他者を受け入れ連帯する、そのような人の在り方を意味する。そのためには毎日遭遇する様々な出来事に対して、感じていながら動揺や反発をすることなくありのままを受けとめ、冷静に対応できる自我の安定がなければならない。

現代社会のあり方は、一方で私たちに「自立した市民」として生きることを強く求めるものでありながら、他方で、そのような人間に成長することを難しくする要素もたくさん示していた。そんな中で、「目と手と心」の動きを中心とした身体感覚をよりどころとしてすすめられる美術の活動は、子どもたちに自分が感じる身体と心をもった存在であることに気付かせ、今ここで起きている事柄をとらえ、目の前にないことに意識を至らせ、心地よさや開放感、心の安定をもたらすものとして、現在では日常、なかなか体験することの難しい要素や機能をもっていると考えられる。そしてこのような活動が人間の有機的な成長にとって大切なものであることを、美術教育の多くの取り組みは繰り返し示してきたのである。これは論文中で述べてきた「自立した市民」としての足場を固める働きを、美術

という活動がもっていることを示すものである。

だが、残念ながらそのことを美術教育の外部の人たちは十分に理解しているとは言えない。「技能教科」「情操教育」という言葉では示すことのできないこの教科の役割を外部の人たちに認識してもらうために、私たちはまさに今、集中的に取り組まなければならない時期なのだと思う。そして同時に、未来の大人である子どもたちに対しては、そのことを授業での体験を通して実感してもらうしかないのではないだろうか。

描画活動は、今述べたような美術科の美術科らしい特質を最も端的に示している領域だといえる。それは造形活動の外側に目的があるというよりは、手の動きによって刻々と変化する画面の変化を感じることでそれが目的となるような活動だからだ。ある意味で活動の意味を一般の人が認識することが最も難しい領域ということが出来るかもしれない。授業におけるそのような活動の可能性を探ることで、美術科の役割を逆にはっきりと示すことが出来るのではないかという意図も、この論文にはあった。その目的はどのくらい達成できただろうか。

具体的に描画活動の事例を考察する段階で、心残りな部分がある。本当はあと2つ、事例を付け加えたかった。ひとつは共同制作の可能性について、もう一つは子どもたちが日常親しんでいるゲームやコミックのキャラクターを使った表現についてである。残念ながら時間的な問題もあり、この度の論文にこの2つを載せることはできなかった。この2点が加わることで、描画活動の可能性についての視野は、もう少し広がっただろうと思われる。

ともあれ、このような形で描画活動の在り方を探ってきた。具体的な描画活動の方法は無数にあるだろう。それを自分自身で、また目の前の子どもたちに対して、その時々での在り方にあったと思われるものを見つけて試してみたいと思う。そのときに、完成度の高い、技巧的に優れた作品を作らせることを求めるのではなく、いかに子どもたちに「目の前で、自分の心の中で起きていることに気づき、感じる事ができるか」を求め、一人ひとりがその子の発達段階や能力に合った見方・感じ方を十分に発揮して作品に向かったかを見取る評価をすることが重要なポイントになることを、私自身の中では確認することができたと思う。

このようなスタンスで子どもたちと日々の活動に取り組んでいったとき、子どもたちの作品はどのように変わっていくだろう。また、子どもたちが感じる描画活動に対する手応えや美術の授業に対する印象はどのように変化していくだろうか。それをこれからの実践をとおして確かめていきたいと思う。

II 学校などにおける研修成果の活用計画

- ・毎日の授業実践の中で、題材開発、技法指導、支援と評価の各段階において、得られた知見を直接的に反映させていく。
- ・校内研修会や作品展示などを通じて、美術科の役割や意義、教科性について、校内の職員をはじめ父母、地域の方々に理解を促していく。
- ・区中研および都中学校美術教育部会において成果を発表し、描画活動をはじめとした美術教育の充実と発展に向けて、美術科教員間で議論を深めるための働きかけを行っていく。
- ・各種民間教育団体及び「美術科教育学会」などの主催する研究会の場で発表の機会を得、成果を発表していく。また、機会があれば各種美術教育誌などにおいて、紙上発表も行っていく。

大学院派遣研修成果活用状況

所属校	豊島区立千登世橋中学校	氏名	はまわき みどり
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	美術教育専攻 美術科教育コース
研究主題	中学校美術科におけるゆたかな描画活動に向けての考察 －現代社会を生きる自己への視点を通して－		

1 ①日常の授業の改善

所属校での成果活用

1. 描画用具の工夫

●毎授業に12色色鉛筆を持参させ、塗り重ねによって各自がイメージする色を表出できるように練習させた。1・2年生の1学期定期考査で色鉛筆による彩色スケッチの課題を出したところ、技能の向上が見られた。

●授業時数縮減の影響もあり、生徒たちは小学校時代から水彩絵の具を扱う時間が減っており、絵の具に対する苦手意識が強い。これを払拭し気軽に絵の具を使って描画活動を行うことができるようにするために、パレットの使い方を工夫した。入学時に購入してもらった2パレットのポスターカラーセットのうち描画用パレットにすべてのポスターカラーを色相順に並べ、乾燥させる。生徒たちは常にすべての色が出そろった状態で彩色活動ができることになり、絵の具準備の時間短縮と共に、抵抗無く様々な色の混色を試すことができる。1年生の1学期に週1時間という制約の中で小品ながら多様な彩色描画活動を行うことができた。



2. 個の適性や欲求に対応した題材開発と支援の工夫

●ゆたかな表現活動の基本は「一人ひとりがいかに気づき感じるか」「目と手と心を活性化して取り組むことができるか」という考察をふまえ、生徒一人ひとりの発想や工夫によって多様な造形活動が予想される活動を二年生の立体表現「文字のある風景」で行った。振り返りシートでのやりとりや授業内個別支援により、生徒たちは各自が制作に必要な材料を持参し、自分の世界に入り込んで試行錯誤を繰り返した。完成作品は予想以上に多様で、鑑賞活動の活性化にも繋がった。

②生活指導場面での活用

●担当学年では学習集団としての規律や人間関係などの面で課題が表に現れてきた。それらへの対応の際、研修ですすめた心理学的・社会学的理解が子どもたちの行動や内面を理解し、働きかける助けとなっていると感じることが少なくなかった。またそのようなアプローチの仕方を理論的な裏付けの中で説得力をもって同僚に説明できる基盤ができたと思っている。教師集団への働きかけはまだ十分とはいえないが、短期的方策、長期的方策と分けて共に考える足がかりとしてゆきたい。

<p>2 委 員 会 ・ 研 修 会 で の 成 果 活 用</p>	<p>東京都中学校美術教育研究会研修部主宰実技研修会の講師として提案</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研修会テーマ「すぐに実践できる教材」の提案 ● 実施日：8／1（火）日野市立平山中学校 参加者数 10名 8／3（木）目黒区立第八中学校 参加者数 20名 ● 提案題材「三原色粘土を使ってオリジナルマグネットを作ろう」 ● 提案内容概要：色に関する基本事項の学習を、1年生という発達段階に合わせて楽しく体感的に行わせたいという願いから生まれた題材。その趣旨と授業実践のあらましを模擬授業の形で参加者に示した。（資料参照）
<p>3 成 果 を 生 か し た 研 究 授 業 な ど</p>	<p>SoVA (SEED of VISUAL ART) プロジェクト（平成17～19年度科学教育研究助成金基盤研究大学、美術館、小・中学校教員の三者によって組織されている 代表＝橋元泰幸鳴門教育大学教授）の一環として、美術館と連携した鑑賞教育の実践に向けて関係者の協力を得て研究を進め、授業実践の後、現在まとめ作業に入っている。本実践のまとめは平成18年度 SoVA 報告書に含められる予定である。（詳しい内容は、筆者まで）</p> <p>[概要]</p> <p>美術館との連携により、2年生全員を対象に美術館を訪問し鑑賞活動を行う実践を2学期はじめに行った。実施に当たっては総合的な学習との複合カリキュラムとし、本校の総合的な学習のテーマ「共に生きる」の一環としての学習活動と位置づけた。</p> <p>鑑賞活動を、生徒たちの意識の中に「おもしろくて創造的な活動」と位置づけさせることがある程度はできたと思っている。また学年教師集団に対しても鑑賞活動の可能性や美術科の意義等について認識を深めてもらう一助となったと考える。来年度以降校内行事として定着させていく方向である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 実施日：8／30（水） ● 訪問先：東京国立近代美術館 ● 参加生徒：豊島区立千登世橋中学校2年生155名 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
<p>4 今 後 の 活 用 計 画</p>	<p>①今年度全国造形教育研究大会（関東甲信越ブロック長野大会）に参加、東京都の代表として分科会で発表する。発表内容は上記の「美術館との連携による鑑賞実践」に関するものとなる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 発表日：11／1（水） ● 場所：長野県長野市若里市民文化ホール <p>②今年度豊島区中学校教育研究会一斉部会において美術部会で研究授業を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 実施日：11／8（水） ● 場所：豊島区立千登世橋中学校美術室 ● 研究テーマ「描写力を高める題材の工夫」

3原色粘土を使ってオリジナルマグネットを作ろう

(1年生：2時間扱い)

色の性質や色彩に関する学習は1年生の前半で行うことが多いです。その後の造形活動の基礎となる大切な事項ですが、発達段階に合わせてできるだけ楽しく、感覚的に掴む形で自分のものにしていくような方法はないかと考え、そのうちの3原色による混色の学習を、粘土を使って行うことにしました。

使用する材料・用具

三原色粘土

白粘土

木工用ボンド マグネット ラップ類 爪楊枝 濡れふきん 水

活動の目標

- ・混色による色の変化に関心を持ち、楽しく意欲的に活動に取り組むことができる
- ・3原色による混色の原理を理解し、自分のイメージする色を混色によって作り出すことができる
- ・色や形を思いうかべ、造形方法を工夫してオリジナルマグネットを作ることができる

活動の流れ

①4色ダンゴを作ろう (混色に慣れる)

- ・3原色粘土を使って【オレンジ・緑・紫・黒】の四色の串ダンゴを作る
「どの色をどのくらいの割合で混ぜ合わせるとできるかな？」

②オリジナルマグネットをつくろう

- ・身近な具体物のミニチュアにすることを基本とする
- ・マグネットという限られた大きさの中で表現できるよう、色や形に気を配り丁寧に仕上げる
- ・道具は爪楊枝一本で、かなりできる

留意点

- ・乾燥しやすいので、扱っていない粘土は常にラップでくるむようにする
- ・手をふきんで湿らせ、必要なら水を数滴垂らしながら制作を進める
- ・全体の形が整った時点でマグネットを接着してしまった方がよい